

じふにばんしんろくじー 二〇〇二年版



# うろこアンソロジーニ〇〇三年版 目次

Doll M	片野晃司	3	
睡魔	足立和夫	7	
落日	希代セツ	10	
プラスティックの筆入れに卵焼きをいれて	桐田真輔	16	n.qyi
母音の領分			14
サマーキャンプで仲間に内緒で彼が海辺に埋めたもの			桑原義江
落陽	石川為丸	24	
オリオン	小泉伸明	25	
やがて ゆき が ふり つむ の に			妖怪の一本指
マネキン	伊波泰志	29	28
作業所	堀江美奈子	30	
転生	きじむなあ	31	
私の月	河合民子	32	
翠町・らすとどりーむ	みー	33	
飛ぶ横顔	清水鱗造	35	
日曜日	若井弾丸	37	

DOLL M

片野晃司

鳩はべりべり剥がれ雨雲に帰っていった

目覚まし時計が地面の下でごりごり鳴った

いやな埋立地だった

濡れた靴はもつといやだった

ぼくの足はプラスチックだった

自転車があったらよかった

いさぎよく踏める土なら

もつとよかった

埋めちやえばよかった

美しさを諦めた国

美しく諦めた国

諦めが美しい国

街ごと埋めちゃえばよかった

生活ごと埋めちゃえばよかった

それでも電話は通じる

メールも届く

ここももうすぐ埋まる

水溜りを飛び越える

6月

すべすべした手触りの

隣の席のMさんの肘を思い出す

僕のほうへはみ出た肘は

固い音がした

それは事件じゃなかった

安いモーター仕掛けの

ぴかぴかの肘

ちよっと僕のほうへはみ出ただけなのに

叩かなくてもよかった

おでん臭くて湿気っていて

泡立っている運河沿いのコンビニで

何か買ってあげたかった

できることならキスもしたかった

戻ってきたら

埋め立てられて

Mさんは土の下だった

諦めるしかなかった

僕ももうすぐ埋まる

その夜

Mさんへメールを出した

Mさんの上に道路ができて

魚を積んだ保冷トラックが何台も

何台も走っていくのを想像して

そのたびに心臓が膨れあがり

それから

鉛のベッドをすこし窪ませて眠った

ごめんなさいMさん

## 睡魔

足立和夫

睡魔とたたかう朝

満員電車のなかで

目を瞑り

睡魔をとりのぞこうと試みる

この試み自体が朝の儀式

ぼくの周りに林立する人体

空に落ちていく目玉が見るものは

すべての人は過ぎ去りつつあるということ

だれもが閃光を放つ生涯を送っている

一瞬 視角の暗闇に穴を穿つ

人のかたちのなかに

それを見る

石の無表情の裏側に

それはある

わかりにくいかもしれないが

ひとつの生涯の死は

全世界が

消え去ることだ

ぼくが死ねば

全世界は

消滅する

わたしたちは苛酷なものを持つ

逃れようと試みれば

正気を失う

そうなのだ

神なき創世紀は

いまだに続いている



真っ最中  
それでも睡魔は  
去ってはいかない

## 落日

希代セツ

新しい朝は

古よりの始まりに

美しきに飢えてはいるが

縁の祖母は恍惚に

音もなし

悲しいかな

昨日と呼べる日は

苦悩を呼び

戯論のうちに黄昏行く

混沌

残桜を思い

師走の空に少し笑う

寸劇の近隣

忙しくも蠢く命の流れを憐れむ

卒寿の白き瞳孔

確かに

疇昔は薄れ逝けども

追悼の涙は未だ落ちず

掌の皺とは違い

吐露し尽くせず

何をか為さん

人情の大河に流され

抜き差しならずば

念ずるに如かず

荷前の使い

儂くも

人の歩みを

俯瞰して

辺境に見出す

本編のフィルム

真綿の香りと手触りと

実り朽ちた

無数の木々が

芽吹く

森を想う

痩せた脳に

揺らぐからだ  
欲望

落日の花を

リビングに添えて

縷々と語る昔日の恩

霊性の

老境が

私を観ん

## プラスティックの筆入れに卵焼きをいれて

m. qv1

夕方、ぼくたちがS区立図書館で本を読んでいると太った黒人の守衛服のおじさんが  
回って来て、閲覧室と本棚をぬって日本語で「閉館」「閉館」……と言ってやって来た  
のでぼくたちはもう薄い灯りの図書館をでた。

それから家に帰って御飯を食べてねてしまった。

でも、夜中にぼくは筆入れを忘れてきたのを思い出した。どうしても気になって闇夜に  
家を抜け出してそうと図書館へ行ってみると近代的な建物の区立図書館はキラキラ  
照明が輝いていてガラスごしから色々な人種の人たちが本を閲覧しているのが見え  
る。ぼくの忘れた筆入れも机の上にあるのがくつきりと見え、ぼくはたいへん安心し  
て家に帰った。

ふとんの中でああ、夕飯に食べた黄色い卵焼きは真夜中の図書館だったんだと納得した  
ぼく。ぼくはそれ以来とうとうS区立図書館へは行かなかったが、ぼくのあの筆入れ

は青いプラスティックでできている。図書館はダイヤモンド。

# 母音の領分

桐田真輔

A

あなたはやま

あららかなやま

あなたはかわ

あまやかなかわ

あなたはばら

あざやかなばら

あなたははか

あたたかなはか

I



U

にしにいりひ

いしににしき

しきりにちり

きりぎしにしぎ

きひにみいりし

きみしりしひ

ぬるむすーら

すするらららら

すずつるすらゆ

つゆらくむゆず

つつむゆりつり

うつむくくべつ

E

てれて

へべれけ

せめて

ねせてね

O

いのいののいんと

どのことともちがうこと

おっともほとほと

そもそもとととと

ぼろぼろのいのいの

おとこのこといん

註) この言葉遊びは、関富士子さんの「影をさがす」(関さんの個人詩誌「raintree no25」所収)、藤井貞和さんの「《anatawa-akahadaka》メル」の1の部分(詩集『ことばのつえ、ことばのつえ』(思潮社)所収)といった興味深い試みに触発されてつくって見たものです。なお、「I」のなかの「きひ」という言葉は海埜今日子さんの詩集『季碑』(思潮社)のタイトルのつもりです(やや苦しい言い訳<sup>(?)</sup>)。

サマーキャンプで仲間にも内緒で彼が海辺に埋めたもの

桑原義江

取り消された夏と

失われた永遠の あいだで

うらぎりものの 賢人が

おしゃべりな 淫乱女を 追いはらい

忠義な おろかものたちの

純潔と 禁欲を 称賛したものであるからさ

世間はいまや

腐臭をはなつ憎悪に

満たされつつあるのだが そこへ

ずるがしこい

ぼくたちの救世主が やってきて

男の子たちに

どこかになにかがあるのかもしれないけど、  
どうせそれはぼくたちのものじゃないんだ！

などという 愁嘆場の お告げを  
ご披露くださった ものだからさ

境界線が こんなにも 鮮やかだなんて、  
いままで全く知らなかったよぼくたちは！

なんて 感謝しながら 男の子たちは

凍え死にしそうなほど あかるく

ほほえんで

くちもとに ひびがはいって

痛くなっても

ほほえんで それから

天をあおいでみると

コロナだけになった 太陽が

男の子たちをみて 泣いていた。

誰もぼくのカップを満たしてはくれない。

だって 空っぽであることがぼくだから！

なんて つぶやきながら 泣いていた。

太陽はもちろん

己自身を哀れんでいたんだ。

男の子たちじゃなくなつてね。

注：「男の子たち」のところは「ピバリーヒルズ高校白書」の頃のケリー・テイラーがピーチピットにたむろしてゐるブランドン達にかける朝の挨拶「ハーイ、オトコノコたち！」のニュアンスで読んでください。

## 落陽

石川為丸

遠く 干潟の泥土の中に  
形をとどめないものが、  
落ちて汚れています  
揺れるナハキハギ  
島でのかなしみはそのままに  
橋の上を吹き過ぎる風を あの一ひとは  
すこしはにかみながら  
アジアの風：  
と言いました



# オリオン

小泉伸明

此処から去るべきなのか

去るとしたら涙を浮かべて肩を

落とすべきなのか

それとも顔をあげて冬の一等星を

繋いでいくべきなのか

此処に留まるべきなのか

留まるとしたら冷たい眼を無視して

カーラジオに耳を傾けていくべきなのか

それともモガイモガイで生活を

繋いで往くべきなのか

大切なのは格好善いこと

目指すものは同期より多い給料

森羅万象解った様な顔して

独りで歩けやしない

見えないくらいに異物が角膜を傷つけ

世界は闇だと平気で言つてのける

其処まで行つてやつと

僕は人の世に一步踏み込むのだ

心無い言葉も

馬鹿にした笑い顔も

祝福に

去るも留まるも

悲劇ではない

大切なのは断崖擦れ擦れの処に立って

下を見下ろせる勇氣  
引き摺り込む様な海原と  
吸い上げられる様な大空

何も無いことが清清しい

心だけがぼつかりと浮いている

確かなものは無い

大切なものは心の強さ

得難くも得難くも

希望に満ちた渡り鳥の群れも

本当は不安に押し潰されそうで

時折悲鳴をあげて海を渡るんだから

やがて ゆきが ぷり つむの に

妖怪の一本指

きたかぜ に ふるえ ながら  
はだか の ひとり きり で  
だれ を たおす でも なく  
あるき はじ める ため に  
つよく なろう と して も  
かわいた のど を からして  
なんと たずね て みて も  
だれ も おしえて くない  
さみし ければ おおごえ で  
よぶ おぼえて いる かぎり  
の すれ ちがった ひとびと

マネキン

伊波泰志

自分自身を悲しむのは  
もう終わりにしようと  
何度呟くのだ  
沼にとらわれたその足は  
おまえによく似た  
マネキンの足だということを  
早くみとめろ

(短詩協BBSより)

# 作業所

堀江美奈子

人を取り、

皮を剥ぎ、

肉を削ぎ、

臓を出し、

骨をかつぱくと、

ぽかりとしろい孤独があった、

とりだすとそらとふるえ。

ぱかんとちった、

いちめんに。

## 転生

きじむなあ

「ここからは国家の外だぞ」と関守が行く手をはばむ。  
肉の内側をおしひろげて黒いバラの入れ墨を示す。

「よし行くがいい。二度と戻ることはできまいぞ！」  
その途端、小舟は嵐の海にのみこまれて、消える……。

ゆっくりと目をみひらくと、みおろす十幾つもの小童の瞳。  
暑い！ 浜に打ち上げられているのに波の音がきこえない。  
「ここはどこだ？」と問うと、子らが異国の言葉でざわめく。  
その背後からうら若き乙女がつぶやく。「ここは沖縄です」

## 私の月

河合民子

わたしのからだにしみついているのは

あなたがくれたくれないいろのつきのひかり

いつまでもはがれないひかりのいろが

わたしのちぶさのうえでもえだして

おいてきたものをとりにいってしまうのです



## 翠町・らすとどりーむ

みー

あの日海岸に忘れてきた財布と車のキーを捜しに  
自宅に帰る道すがらなにか祭りでもあるのかあったのか  
雨が降ってるにもかかわらずえらく人通りが多い  
それにしてもこの明るさはなんなのだろう

ふと携帯が鳴り「ゴールデンバットを買って来てください」  
と澄んだ声で原田知代が電話してきた「いま？」  
「そうです」

家では表にテーブルを出し家内が近所の子と思しき連中を  
集めてパーティをやっていた

テーブルのおかげで車を出し損ねた私は徒歩でバス停に

ゆったりと流れる氾濫したうす緑の小川は生息していた虫達  
を全て押し流すかのようにみえた

飛ぶ横顔

清水鱗造

なんかねえ

切れ目なく人間のことを考えているのも

それも宙のヒモみたいに

すこやかな

ところということか

皺ができるというのか

にがいヒモだけど

かならずなぞっていく

彼らがいて

そのうちに

どこかの町や山で

つぶやくんだよね

飛ぶ横顔を高速で撮影すると

雲や空の様子がせわしなく変わり

もつと速くすると昼と夜で点滅し

さらに速くすると

ぼろぼろと岩石が風化する

削れてくる

でもその周りにシミのように

絶えずヒモが広がるんだよね

(発酵開花拡張劣化腐爛残滓)

顔の皮膚に表れていく

日曜日

若井弾丸

♪日曜日に

市場へ出かけ

糸と餌を

買ってきた

釣りや 釣りや

釣りや 釣りや

釣りや 釣りや

釣りや 釣りや

りや

釣りや 釣りや

釣りや

釣りや

りや

(「パーマネント・プレス」33号「言葉遊び」特集号より)